

貴族社会が生んだ「天才」

モーツァルトの研究者として知られるピアニストの久元祐子さん。これまではモーツァルトの作品の魅力について語ってもらったが、今回はモーツァルトが生きた時代が作品に与えた影響について考察してもらった。

曲で人間ドラマを表現



モーツァルトの研究者として知られるピアニストの久元祐子さん＝(本人提供)

ピアニスト
久元祐子さん



モーツァルトを
楽しむ

モーツァルトが過ごした18世紀後半は完全な貴族社会

で、音楽家が現在のようない位置を築く前の時代でした。雇い主を楽しませる使用人として扱われ、貴族の好みに合わせて曲を作り、演奏するのが主な仕事だったのです。もちろんモーツァルトも例外ではなく、貴族に依頼されて作曲

することも数多くありました。

モーツァルトはバイオリンの父のもとに生まれ、5歳のころから父に連れられて欧州中を「演奏の旅」として駆け回っていました。36年に満たない人生の10年以上を旅先で過ごしたとも言われています。旅先では貴族の前で演奏を行い、その天性の才能を見せつけました。その若さで腕前は話題となり、「神童」と呼ばれるようになりまし

た。皇帝の宮殿にも出入りしていたとされ、オーストリアの女帝マリア・テレシアの宮殿で演奏した際には、娘であるマリー・アントワネットと出会い、「将来僕のお嫁さんにしてあげる」と言ったというエピソードも残っています。幼い頃から貴族社会で育ったことで、モーツァルトは美しく華やかな貴族文化を体内に取り入れていきました。それが作品が持つ上品で典雅な雰囲気になっていきます。モーツァルトが持つ豊かな表現力

は、大人になって身についたものではなく、子供のころからそばにあった超一流の世界で身につけたものだったのでしよう。

その一方で貴族たちを近くで見ていることもあり、一般の人では知ることのできない貴族の肉体的な部分も多く目の当たりにしていました。その経験も作品には大きく影響しており、貴族社会の中での人間ドラマを表現した作品も多く残っています。最も印象的なのがオペラの「フィガロの結婚」です。やんちゃな性格だったモーツァルトは、この作品に貴族に対する風刺的な要素を多く詰め込みました。作品では、貴族たちの複雑に入り組んだ恋愛模様や、

一番の権力者とされる伯爵が頭を下げて謝るシーンなどが描かれています。まるで「貴族も人間だ」と訴えているようです。

作品で表現されている「明から暗」「天国から地獄」といった曲の変化も、こうした日常が可能にしたものだと思います。

欧州を旅する中で、モーツァルトはその土地の音楽や音楽家と出会い、最先端の音楽を吸収しました。オペラや交響曲、歌曲など多様な楽器を使った曲から教会音楽まで、他の音楽家と比べてもモーツァルトの作品は10、20年先をいっていました。やはり彼が「貴族社会が生んだ天才」なのだと思います。

ひさもと・ゆづり ピアニスト。東京芸術大学大学院を修了後、国内外でコンサートを開催。モーツァルトを特集したCDや作品についての研究をまとめた著書も数多く発表しており、高い評価を受けている。現在は国立音楽大(東京)教授。今年にはモーツァルトのピアノソナタ全曲演奏のツアーを実施しており、9月に横浜、10月に東京などでのコンサートを予定している。問い合わせはプロアルテムシケ(03.3943.6677)。